

## 6 未来へのフロンティア、カリフォルニア

### 6.4 バブル時代と日本企業

私が事務所を設立してまもなく、日本はバブルの時代に入った。バブルの金を持って、日本の多くの企業がどんどんアメリカに進出して来た。日本の大手や中堅のゼネコンも、ロサンゼルスにそろって事務所を開いた。1980年代の後半である。日本の企業は、マネー・ローリング、税金対策用の金で、ロサンゼルスにある超高層ビル、ホテルやゴルフ場等、不動産を次々と買いあさった。ニューヨークやシカゴでも同じだったろう。日本の企業が、アメリカ全土の主要都市の有名な不動産物件をほとんど買い取ってしまう様な勢いであった。

私も日本の企業に、営業というか、挨拶回りというか、とにかく仕事を得るために行ってみることにした。私が最も不得意とするところである。私は長いことアメリカの社会、白人のコミュニティの中で働いてきたから、日本のコミュニティの中へ入っていくのは、やはり戸惑いがあった。その頃は、日本のどの企業もお金を十分持っていたので、たいへん強気であった。アメリカに来たのだから、アメリカ人の建築家を雇うと言って、面会さえ断われた会社もある。会ってくれる会社もあったが、私はどの様に挨拶したらいいのか、戸惑った。お辞儀をしたらいいのか、握手をした方がいいのか、なんともゴコチナイ挨拶になった。

日本の企業や不動産会社は、東京や大阪に比べれば、ロスの建物や土地が安い、安い、と言って、買い続けていた。私のクライアントになった人も、住宅マンションや別荘を、何か軽くショッピングでもする様に買っていた。50以上の住宅を投資として買ったであろう。

ある日、あるゼネコンの紹介ということで、ある日本の不動産業者、ディベロッパーが

日本の投資家のために設計した、結婚式やパーティーの為の海の近くの  
レンドビーチのホテル、1989年設計。



ヘリコプターに乗って土地購入のためにを視察して回った、ロスの東、サンパナデノカウンティー。

私の事務所を訪ねてきた。このディベロッパーは、日本からいろいろなクライアントを連れてきた。集合住宅、ホテル、語学学校、高級住宅等に投資をしようとする人達である。

多くのクライアント



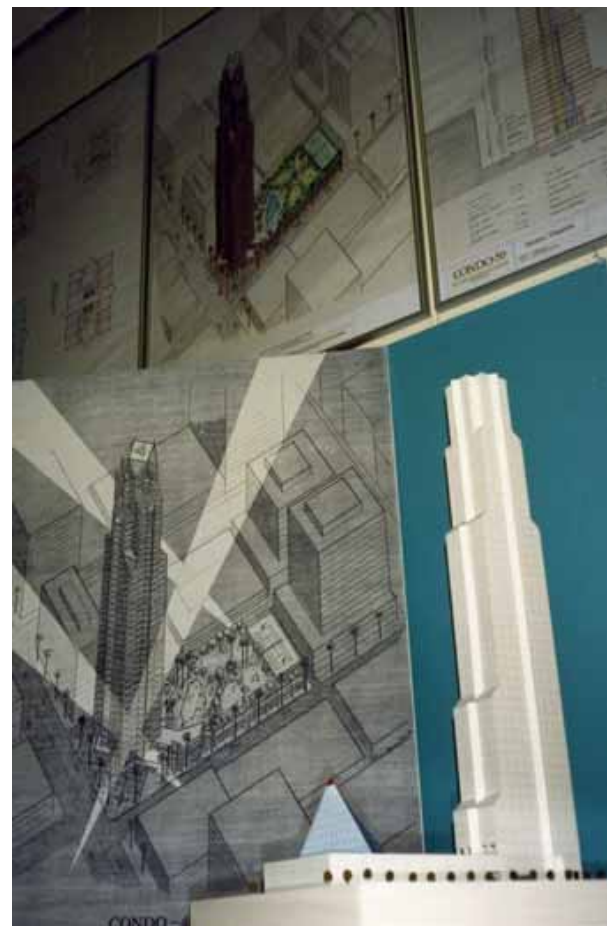
は、日本から若いきれいな秘書を連れて来ていた。夜になると、彼等は高級レストランやクラブへ出かけて行った。私も何度も誘われたが、しかし、どうも私の性には合わない。彼等は、金をばらまく様に使っていた。何かが狂っているように、私には思えて仕方がなかった。

彼は、日本からのクライアントがロスのエアポートに着くと、近くのヘリポートからヘリコプターでそのクライアントをうちの事務所の屋上まで連れてきた。うちの事務所で会議をし終わると、再びヘリコプターに乗って、ロサンゼルスを中心地へ視察に出かけて行った。空から、空地や古い建物を見つけると、すぐにアメリカの不動産業者に、それらの物件を調べさせた。それから、ヘリコプターで避暑地のパームスプリングへと飛んだ。彼等は少しの時間でも惜しむ様に、ヘリコプターで飛びまわっていた。そのディベロッパーはついに自分用のヘリコプターまで買ってしまった。私は彼等のヘリコプターで空の上まで同行したが、なんだか、現実の世界ではない世界を、飛び回っている様な気がした。そのディベロッパーが持ってきたプロジェクトの中で、私が最も魅力を感じたプロジェクトは超高層の複合建築物を建てる計画だった。彼はヘリコプターで視察をして、隣合わせの4区画を買った。そこには5階建ての大きなアパートの建物が建っていたが、それらをすべて取り壊して、更地にした。この地域は市の再開発地域だったので、市の開発局や市の建築課はたいへん協力的であった。アメリカの弁護士も雇って、プロジェクトはどんどん進んだ。最初は50階建てのマンションビル構想であった。ところがさらに隣接する敷地が購入出来ることになって、一挙に容積率が増え、90階建ての複合建築物に計画変更になった。



ヘリコプターに乗って、超高層ビルが建てられそうな敷地を探しまわった。

ショッピングセンター、事務所、ホテル、マンションの50階建ての複合建築、最初の案。プレゼンテーションボードロイニングと模型





左上側のフロアプラン；  
91階のマンションビルの  
最上階は1-フロアが1  
ユニットの超豪華なマンシ  
ョンとなり、360度の眺望  
がある。



Penthouse 5,500 SF  
PENTHOUSE FLOOR PLAN

左下側のフロアプラン；  
すべてコーナーウ  
ィンドーがある豪華スイ  
ッツのホテルのフロア  
プラン



Hotel 9,500 SF  
HOTEL FLOOR PLAN

1階から10階まではショッピ  
ングセンター、11階から30階ま  
では事務所ビル、31階から60階ま  
ではホテル、61階から90階まで  
はマンション、91階は展望台、そ  
して屋上にはヘリコプターが常時止  
まれる施設を設計した。

この複合ビルは、機能が立体的に重なり合うビルに  
なり、シャトル・エレベーターによる、人の移動がた  
いへん重要になった。その機能に合わせて、スカイロ  
ビーやスカイラウンジをいくつも付けた。ホテルやマ  
ンションのスカイラウンジには、スイミングプールも  
設けた。最上階のペントハウスへは、プライベートの  
エレベーターを設置した。360度眺望のあるマンシ  
ョンである。展望台は総ガラス張りで、はるかに地平  
線や水平線が湾曲に見られる。イメージとして、超高  
層ビルが竜巻となって空高く舞い上がってゆく、そう  
いう形をイメージして設計した。ビルの頂点にはダイ  
ヤモンドを冠した様な形になった。見ようによっては、  
UFOのフライング・ソーサーがビルの屋上に降りた形で  
もある。夜になると、このビルの頂点が光り輝く。

私は、SOMで超高層ビルの設計の経験を持っていたの  
で、その経験を生かして、設計していくことが出来た。  
SOMで働いていた構造技師が、自分で事務所を始めたの  
で、彼にもチームに入ってもらうことにした。

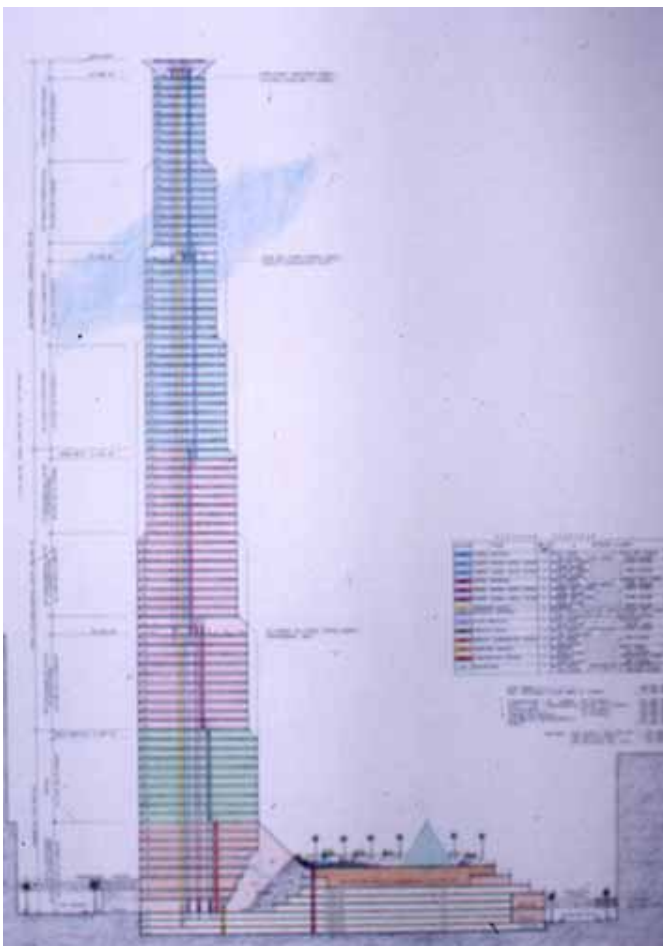
この計画は、私のイェール大学の大学院の卒業設計  
に多少似た複合建築であった。とにかくシカゴから西  
側では、一番高い建物となる。私としては夢のプロジ  
ェクトであった。

私は、イェール大学の大学院時代、卒業設計を発表  
した時の言葉を思い出して、この時のプレゼンテーシ



マンション、ホテル、事務所、ショッピングセンターの  
91階建ての複合建築、1990年設計。

超高層ビルの断面図。常時ヘリコプターが屋上に止  
まれる様になっており、91階の展望階から、マンシ  
ョンとホテルのロビーにエクスプレスのエレベーター  
が直行できるようになっている。





### ロスのダウンタウンに建つ予定だった、マンション、ホテル、事務所、ショッピングセンターの91階建ての複合建築

ヨンも、「I have a dream in Architecture.」(私は建築に大きな夢を持っている)という言葉で始めた。その夢のようなこのプロジェクトが実現に向かって、計画はどんどん進んでいた。市とのコーディネーションも順調にいった。計画はすべてうまく進んでいた。しかし、ある日、日本から連絡が入った。このプロジェクトを一時ストップする様に、という電話だった。バブルがはじけた頃である。古い建物を取り壊し、新しいビルを建てる準備は整っていた。しかし、プロジェクト再開のメドはまったくたたなかった。やはり夢であったのか、と私は思った。しかし、いつか、その夢を実現したいと思った。

ロサンゼルスのリトル・トーキョーは、日系人一世と二世が作りあげた地域である。第二次世界大戦中、日系人は、日本の軍国主義戦争のために強制収容所に入れられた。リトル・トーキョーは荒廃した。しかし、戦後、リトル・トーキョーに戻ってきた日系人達は、リトル・トーキョーを再建した。リトル・トーキョーはサバイブしたのである。このリトル・トーキョーには、古い小さい建物が建ち並んでいる。日本人の移民歴史を物語る、100年以上の歴史のある古い建物も残っている。この街の商店街や文化会館等は、日系人の憩いの場であった。その日米文化会館や劇場ではよく日本文化を紹介する催し物が行われている。特に夏には二世ウィークと呼ばれるお祭りはパレード等も含めて、二週間ほど続く。日本の太鼓を打つ音が、リトル・トーキョー中に響き渡り、人々は輪になって、盆踊りを踊っていた。故郷をしのんでのお祭りである。

時折、私もそのお祭りに行ってみた。その太鼓の音は、幼い頃、私の日本の田舎で、母に抱かれて聞いた太鼓の音に似ていた。リトル・トーキョーは日系人の心の故郷なのである。

ロサンゼルスは、車で建物から建物へと移動する街であり、言わば、車の街である。しかし、このリトル・トーキョーには、人間の歩ける外部空間があった。そこは親密で、温かい外部空間だった。

日本のバブルの時期、ロスアンゼルスにおいても、日本の企業が不動産を買いあさった。リ

ホリデーシーズンの時の事務所のパーティー、1990年







歴史保存物となっている古い建物群のリトルトーキョーの街並み、  
日系人が築き上げた街。

トル・トーキョーも、この日本のバブルの影響を真っ向から受けることになった。日本の企業は買いあさった古い建物を、どんどん取り壊して、新しい開発の夢をみた。

建築家やアーティストたちは、どのようにしてリトル・トーキョーを現実的に再開発するかについて、ボランティアとして協力した。

ロサンゼルス近くの街に、古い建物をきれいにして残し、人が歩ける街をつくり、再開発して成功した例がある。隣の市のオールド・パサデナや、サンタモニカのダウンタウンの例がそれである。

しかし、日本の企業は、不動産を買った後、古い建物をほとんど取り壊してしまった。そして、バブルがはじけた。日本企業は経済戦争に負けて、ロサンゼルスから引き上げていった。

リトル・トーキョーの大半は空地として残った。一世、二世の日系人達が築きあげたコミュニティは、破壊されたまま深い傷跡として残った。第二次世界大戦で日系人が受けた傷の様に歴史は繰り返されたような気がして仕方がない。日系人達の肩に、またリトル・トーキョー再建の負担が残されたのである。

古い建物が取り壊されなければ、古いビルを再利用してオールドパサデナやサンタモニカのように歩ける良い街を創ることが出来たのに、と思った。しかし長いこと再建のめどは立たなかった。またいつかリトル・トーキョーがかっての街のように栄えると願っているかのように、真夏になると、あの二世ウィークの日系人の夏のお祭りの太鼓の音だけは、変わらずにリトル・トーキョーから聞こえてくる。

日系人の二世ウィークの夏のお祭り、  
日系三世、四世が新しいコミュニティを作っている。

